

南方（ハルマヘラ）

南方三年の補充部隊

愛知県 高木 幸雄

私の徴兵検査は昭和十五（一九四〇）年四月で、第一乙種で第一補充兵でしたが召集令状はしばらく来ませんでした。

当時の第一乙種は召集令状が一年以内に来て入隊したのですが、私の家の職業が輸送業で貨物自動車（シボレー）を持って近くの挙母（コロモ、現在の豊田市）の伊保原飛行場（海軍）に入りしていた関係で遅れたのではないかと推察しております。

当時私の家庭は父、母、兄、兄嫁、私、兄の子二人の七人家族でした。検査から三年たった昭和十八年十月十四日、名古屋城内にある第三師団の輜重兵第三連隊補充隊（中部第十三部隊）に入隊するよう召集令状がまいりました。

同年十月二十日、動員完結、第三十野戦自動車廠に編入されました。

名古屋から大阪へ行き入隊しましたら「青年学校に行った者は前に出ろ」と言われて三步前に出たら、その他の者は教練をさせられましたが、私らは教練免除となりました。その代わり大阪で旅館に宿泊した時、歩哨に立たされ守則を覚えさせられました。天王寺旅館に三泊しましたが、昭和十八年十月二十三日、大阪港を出帆しました。

台湾に到着しましたが部隊の行先が判らず、台湾に一週間停泊したまま待機です。

ようやく出港した時はいつの間にか集まったのか十二隻もの大輸送船団で、私の乗った船は「赤城山丸」(四、五〇〇トン)という貨物船でした。

出港したと思った時、魚雷警報が出て転回して高雄港に避難、その後マニラに寄港した後、沿岸伝いにハルマヘラに向かいました。昭和十八年十一月二十四日に大阪を出てちょうど一カ月かかって無事ハルマヘラ島のクルワに上陸できました。

既に兵器廠や貨物廠が上陸していて、小さな栈橋や道路も少し造ってありました。ハルマヘラ島はちょうど日本の四国ぐらいの広さで、半島が東西南北に飛び出ている変わった形の島で、オーストラリアに近い所でした。

早速、分解して運んだ部品を組み立てて貨物自動車を作り上げ、船荷の貨物の分散作業に取り組み、連日連夜、昼夜兼行でした。

島には小さな栈橋しかありませんでしたので早速、直径一・五メートルもあるラワンの大木を切り倒して橋の材料に使い、まず栈橋を造り上げました。

兵器、弾薬、食糧を船から海岸に荷揚げして直ちに分散、集積等、目の廻るような忙しさでした。

私達の部隊は補給部隊ですから一人も現役がありません。部隊長以下全部が召集兵ですから勿論、妻帯者が多くおりました。

このハルマヘラ島はオランダ領ですが、オランダ人はいりませんでした。僅か二、三家族の現地人がいるだけの島でした。島の北にはモロタイ島があつて、ちょうどこの諸島の玄関番の位置にあります。

私達は一日一台を目標にして、自動車の組み立てをいたしました。そして栈橋を作り終えたら早速、道路を作らねば物資の分散集積ができませんので、円ピとモッコを道具にして土木作業に励み

ました。重機など全くありませんから、あくまで人力作業で苦勞しました。

兵舎は前にいた部隊が作ったと思われる長い建物が一棟あるだけで、片隅を將校室に区切り、他方を兵舎に使っていました。屋根は椰子やバナナの葉で葺き、柱はビンロー樹、壁はヤシの葉で作ってありました。床はビンロー樹を四ッ割にして並べました。

赤道直下の島ですから一日一回はスコールが必ずあり、裸になって体を洗いました。現地人は黒人で定住性が無く、サンパン（樹をくりぬいた舟）に乗って移動する二家族がいるだけでした。

日本がこの島に進駐した理由は不明ですが、一年後には日本の戦闘部隊が上陸し、モロタイ島の争奪血戦が始まるとは、一兵卒である私には想像もできませんでした。

私は上陸早々に班長当番を命ぜられ、半年後には小隊長当番を命ぜられ將校室に出入りしていま

した。

昭和十九年四月頃になると、米軍が豪北方面ピアク島に襲来の気配があるので、東京から「楓」兵団がハルマヘラ島の防備のため来ましたが、その第二次輸送船団が途中で襲われ、二分の一が沈没という大打撃を受けながらようやく到着しました。

楓兵団は第三十二師団（師団長、石井嘉穂中將）で、北支那方面で治安警備の任務についていたものを南方戦局の急迫に備えて転用されたものでした。

甲府の第二一〇連隊、佐倉の第二一一連隊、東京の第二一二連隊の船団が、途中、大打撃を受けて昭和十九年五月十日前後に相次いで上陸し、陣地を構築しました。第二一〇連隊の一部はモロタイ島に上陸しました。

船団の貨物の陸揚げ作業に私たちも動員されましたが、米軍のロッキード四機が偵察に來ました。船団の高射砲がこの米機に対して撃ち上げま

したが当たらず、米機は飛び去りました。

それから毎日毎日空襲です。せっかく荷揚げした貨物、弾薬、糧秣が相当やられました。目の前にあるモロタイ島の飛行場から飛んで来る米軍機には全く手が出ませんでした。我が高射砲陣地から砲身が赤くなるまで対空砲火で応戦し、ロッキード三機を撃墜しましたがそのうち逆に高射砲陣地がやられて沈黙してしまい、以後、米機の飛ぶままになりました。

昭和十九年九月十五日、ハルマヘラの玄関口に当たるモロタイ島に米軍が上陸し第二一〇連隊との間で激戦が始まりました。

同年十二月十五日、第二一一連隊長・米田義輝大佐自ら一個大隊を引き連れてモロタイ島に逆上陸し、斬り込み作戦を強行、守田大佐は力闘空しく戦死（少将に）その奮戦ぶりは米軍戦史にも有名です。

第二一一連隊の第二大隊は、本隊から北東方向に離れたクラウド諸島に配備され、墜落した米軍

機の乗員を処刑した戦犯事件で有名であります。

米軍は空襲はするが本島には上陸はしませんでしたが、わが守備隊への補給線は絶たれ、自活せざるを得なくなりました。

米は空襲でやられ、残った米もシートをかけたのが腐ってしまいました。熱帯地でもあるので農産物の成育が早いので、まず農耕班を作って芋、野菜作りを始めました。次に漁労班を作り魚の漁獲を、製塩班は海水から塩を作りました。果物は現地の人が栽培したパイヤが実った樹がたくさんあって、良い匂いが漂っていました。

上陸当時は食物には不自由しませんでした。私達の部隊は約千人位で武器は三八式騎兵銃だけでした。

楓師団が来てから司令部の場所を甲地区と呼び、命令受領には舟で二時間ばかり離れた、この司令部に行ったものです。兵隊の補充はどうとう一人も無く、六年兵が一等兵でいる有様です。それで昭和十九年十二月に上等兵になった私です

が、六年兵からは「初年兵」と呼ばれていました。

終戦になり武器、弾薬を海岸に並べるようオランダ軍と司令部の交渉で指示がありました。

終戦になってからモロタイ島の米軍倉庫に忍び込み糧秣を獲得したという噂を聞きました。終戦近く空襲が無くなったので、うすうす終戦の気配は感じていました。

当時、私は中隊長の当番をやっていて、たまたま練兵休の兵隊の診察が終わって将校室で休んでおられた軍医少佐殿にお茶を持っていった所、私の顔を見られて「顔が赤いがどうした」と尋ねられました。「いいえどこも悪くありません」と答えました。

それから一週間後、再び診察に見えた軍医さんがお茶を出した私の顔を見て「前と同じ赤い顔をしているな。体温を計れ」と言われ、計ったら四〇度も熱がありました。「これはいかん、すぐ入

院しろ」と言われすぐ入院しましたら、最初チフスの疑いがありました。腎盂炎とわかり、グルワの第一二六兵站病院の療養所に入れられ、約四十日入院しました。

最初は食事がとれず骨皮筋工門になってしまいました。その時小隊長の当番をやっていた同年兵が持ってきてくれたヤシの実の水だけがノドを通ったので、これは非常に旨く、力がつくようになりました。ヤシの実も山奥ジャングルの中にある高いヤシの木にしか残っていないのに、戦友は毎夜二・五キロの道を往復してヤシの実を持ってきてくれましたので、本当に有り難く命の恩人と思っています。注射も毎日打ってくれて食事もうまく体力がついて退院できました。

終戦になり一日も早く日本に帰りたい気持ちの日増しに強くなりましたが、日本兵は昭和二十四年頃にならないと帰れないという話でした。四年間もどうして帰れないのだと色々聞いたらハルマ

ヘラ島には日本軍に協力した台湾の人や朝鮮の人が多くいるので、その人達を先に帰さねばならないというのが理由でした。

四年間も帰れないのかと皆が落胆していたら、早く帰れる事になり、昭和二十一年五月二十二日、米軍のリバティ船に乗れることになり、大喜びで乗船し、船上で復員式をやり、全員階級章を取り外して海中へ投げ捨てました。

日本から来た時は一カ月かかった航海も、帰りは潜水艦の警戒も不要になり、僅か二週間で和歌山県の田辺港に復員しました。

三百円の手当てを貰い、大金持ちになったつもりがパン一個十円とられてビックリ落胆するなどという悲喜劇を演じながら、運送会社に電話したら兄が出て駅まで出迎えてくれました。

戦地からは二回位しか便りを出していなかったので非常に喜んでくれ、家内全部元気だと聞いて安心しました。新品の服が無く、戦地の服装のまま帰宅しました。家業の運送業も私の入隊後、貨

物自動車二輛が徴発され、企業合併とかで名前もトヨタ西加茂運送と変わっていました。トヨタ自動車と合併したそうです。

復員後、軍恩連の会長から「南方へ三年行っているから一度軍恩の申請をしたらどうか」と勧められ申請しましたが、軍歴が不足とのことで却下になりました。